The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はじめに　ポストコロニアル・フォーメーションズ（12）
Author(s)	木村, 茂雄
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62007
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

１.『ポストコロニアル・フォーメーションズ XII』の刊行に際して

この報告書は、大阪大学大学院言語文化研究科主催の「言語文化共同研究プロジェクト」の一環として、この 10 年あまり進めてきた共同研究「ポストコロニアル・フォーメーションズ（PCF)」の 2016 年度の報告書である。この共同研究のシリーズとしては 12 巻目になる。ポストコロニアル・フォーメーションズは、言語文化研究科と文学研究科の教員、院生、博士申請資格者などを「正規」メンバーとする研究会により進められているが、この研究会はさらに、1996 年に活動を開始したカルチュラル・スタディーズの研究会「カルチュラル・スタディーズ・サークル（CSC)」を前身としている。それも含めるなら、すでに 20 年を超える歴史をもつことになる。その間、これらの研究会のメンバーが中心になり、『ポストコロニアル文学の現在』（2004 年、晃洋書房）や『英語文学の越境――ポストコロニアル/カルチュラル・スタディーズの視点から』（2010 年、英宝者）などの書物も出版してきた。

以上のような背景から、PCF の研究会には、言語文化研究科を修了して大学の教職についているものなど、「非正規」メンバーも引き続き参加している。東京、名古屋、金沢、岐阜などから集まってくるこれらのメンバーを抜きにして、この研究会は成立し得ない。毎年のことながら、この報告書は最初にこれらの仲間たちに送り届けたいと思う。

２. 2016 年度の PCF の活動

PCF の研究会は、原則として月に 1 回、その最終土曜日に開いている。基本的にポストコロニアル研究関係の研究書や論文の批評会というかたちを取り、決められた担当者がその内容を紹介・検討した後、全体討論に入る。このようにして、先行研究の趣旨や意義、欠点や盲点などを議論していく。それはまた、私たち自身の批評意識や批評の言葉を鍛えていくプロセスでもある。

2016 年度は、2015 年度後半に取り上げた、インド・ムンバイ出身の文化人類学者アルジュン・アパデュライ（Arjun Appadurai）の *Fear of Small Numbers: An Essay on the Geography of Anger* (Duke University Press, 2006) に引き続き、彼の新著 *The Future as Cultural Fact: Essays on the Global Condition* (Verso, 2013) をおもな材料に、9 回の研究会を開催した。

以下にその記録を残しておきたい。開催日、章・論文のタイトル、担当者の順に示す。研究科の修了生で大学の専任の職についているものには、現職の大学名も付記しておく。

1. 2016 年 4 月 23 日（Arjun Appadurai, *The Future as Cultural Fact*, Verso, 2013）
・Introduction & Chapter 2 “How Histories Make Geographies: Circulation and Context in a Global Perspective” 松本ユキ（近畿大学）
・Chapter 4 “The Offending Part: Sacrifice and Ethnocide in the Era of Globalization” 松本承子
2. 2016 年 5 月 28 日（*The Future as Cultural Fact*）
・Chapter 3 “The Morality of Refusal” 加瀬佳代子（金城学院大学）
・Chapter 5 “In My Father’s Nation: Reflections on Biography, Memory, Family” 花井晶子
3. 2016 年 6 月 25 日（*The Future as Cultural Fact*）
・Chapter 6 “Housing and Hope” 木村茂雄
・Chapter 7 “Spectral Housing and Urban Cleansing: Notes on Millennial Mumbai” 小杉世
4. 2016 年 7 月 30 日（*The Future as Cultural Fact*）
・Chapter 8 “Deep Democracy: Urban Governmentality and the Horizon of Politics” 舞さつき
・Chapter 9 “The Capacity to Aspire: Culture and the Terms of Recognition” 歳岡冴香（近畿大学）
5. 2016 年 9 月 25 日（*The Future as Cultural Fact*）
・Chapter 10 “Cosmopolitanism from Below: Some Ethical Lessons from the Slums of Mumbai” 古東佐知子（岐阜市立女子短期大学）
・Chapter 11 “The Spirit of Weber” 森野豊
6. 2016 年 10 月 22 日（*The Future as Cultural Fact*）
・Chapter 12 “The Ghost in the Financial Machine” 木村茂雄
・Chapter 13 “The Social Life of Design” 小杉世
7. 2016 年 12 月 10 日（*The Future as Cultural Fact*）
・Chapter 14 “Research as a Human Right” 稲垣健志（金沢美術工芸大学）
・Chapter 15 “The Future as Cultural Fact” 伊勢芳夫
8. 2017 年 1 月 28 日（*The Future as Cultural Fact*）
・Chapter 1 “Commodities and the Politics of Value” 安保夏絵・古東佐知子（岐阜市立女子短期大学）・加瀬佳代子（金城学院大学）
9. 2017 年 3 月 11 日
・“Grassroots Globalization and the Research Imagination,” Arjun Appadurai, *Globalization* (Duke University Press , 2002) 松本承子
・“Women’s Work and the Ambivalent Gift of Entropy,” David Staples, *The Affective Turn* (Duke University Press, 2007) 松本ユキ（近畿大学）

３．文化の現在と未来

アパデュライの *The Future as Cultural Fact* は、全 15 章を 3 つのパートに分けているが、それは大雑把にいって「過去」、「現在」、「未来」の 3 部構成といえる。第 1 部（Part 1: Moving Geographies）は、2006 年の *Fear of Small Numbers* でも論じられていた、「暴力」や「テロ」

とグローバリゼーションとの本質的な関係という問題を再度取り上げている。これは現在においても緊急の問題であり続けているが、アパデュライのグローバリゼーション研究にとっては、いわば過去の振り返りといえる。

それに対し、第 2 部（Part 2: The View from Mumbai）は、インド・ムンバイのスラム街における住宅問題とそれに取り組むグローバルな市民運動などに照明を当て、グローバリゼーションの「現在」をサバルタンの地平において捉えようとする。その過程で「下からのグローバリゼーション」や「深い民主主義」の可能性を探っている。

第 3 部（Part 3: Making the Future）は、いわば未来編である。その課題の一つは、従来の文化研究の姿勢それ自体を問い直すことにある。最終章のタイトルは、本書のタイトルと同じく“The Future as Cultural Fact”とされている。直訳すれば「文化的な事実としての未来」となる。ちなみに、カルチュラル・スタディーズのレイモンド・ウィリアムズも、「感情構造」（structures of feeling）に関する彼の議論の中で、文化や社会が慣習的に「過去形」で語られることの問題を指摘している（*Marxism and Literature,* Oxford University Press, 1977, p.128）。文化や社会をこのように「完成物」として捉える文化研究からは、現在の文化を未来に向けて動かしていく「萌芽的」（emergent）ないし「前 - 萌芽的」（pre-emergent）な要素への目配りが抜け落ちてしまうというのだ。アパデュライの「文化的な事実としての未来」の研究も、「未来学」ではなく、現在の文化にすでに萌芽的ないし前 - 萌芽的に潜んでいる「事実」としての「未来」を敏感にとらえ、そこに文化変容の可能性を探り当てようとする姿勢、さらにいうなら、そのような可能性を積極的に引き出していこうとする姿勢といえるだろう。

2017 年度の PCF 研究会も、まずは Janet Wilson, Cristina Sandru and Sarah Lawson Welsh, eds., *Rerouting the Postcolonial: New Direction for the New Millennium*（Routledge, 2010）を素材に、4 月から開始されている。書名が示すとおり、21 世紀における「ポストコロニアル性」の新しい方向づけについて、さまざまな面から検討した論文集である。ポストコロニアル性とグローバリゼーションとの関係がここでもメインテーマの一つになりそうである。私たちも引き続き、ポストコロニアルの文化形成の多様な可能性について考えていくことになる。

木 村　茂 雄